

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02541

研究課題名（和文）イギリスのOracy教育は子どもの「話すためのスキル」をどのように育てるか

研究課題名（英文）Oracy Education in the UK -Developing speaking skills of children

研究代表者

矢野 英子 (Hideko, YANO)

大分大学・経済学部・准教授

研究者番号：00511669

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：このプロジェクトは、イギリスにおけるOracy（話すことを学ぶ/話すことを通して学ぶ）教育の役割と意義を解明するものである。30年間の沈黙、2012年、School21の設立以来、復活した理由や経緯を明らかにした。一連のインタビュー、参加者の観察、研修への参加、そして関連文献の調査を通して、Oracyが辿った道のりを説明し、Oracyの役割と重要性を概念的、実証的に強調した。Oracy Cambridgeの研究者、Voice21（カリキュラムの企画・運営を担当する教育チャリティー団体）のメンバーなど、キーパーソンと構築したネットワークは今後のOracy研究会での研究活動に生かすことができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界がグローバル化し、情報化する中で、日本の社会は少子高齢化、国際化が進み、これまでにない多様な人々で構成されていく。そこでは、さらなるコミュニケーションの力が必要とされる。現在、Oracy教育については日本ではほとんど知られていない。イギリスの「話すことを学ぶ/話すことで学ぶ」Oracy教育の豊かな経験は、日本の子どもたちの言語コミュニケーションの力を育てるために取り入れるべき視点や方策を示唆する。自分のことばで考えを明らかに伝える力は、日本の子ども達の自己肯定感・自尊心を向上させることにも貢献できる。「話すことの教育」の重要性を議論するにおいて、貴重な資料となると考える。

研究成果の概要（英文）：This project elucidated the role and significance of Oracy ('learning to talk/ learning through talk') education in the UK. After a 30-year hiatus, I uncovered why and how this revival of Oracy since the founding of School21 in 2012 has brought. Via a series of interviews, participant observation and oracy training, as well as a survey of related literature, I was able to account for the path Oracy went through and highlight the role and significance of Oracy both conceptually and empirically. By identifying and interviewing the key players in Oracy Education including the Oracy Cambridge researchers, members of Voice21 (the educational charity responsible for planning and managing the curriculum) I have also been able to build a strong network of informants that continue to provide me with insights for my collaborative work with researchers from Kobe on Oracy in Education.

研究分野：英語教育、話すことの教育、第2言語習得

キーワード：Oracy 話すこと・聞くことの教育 イギリスの教育 自己肯定感・自尊心 イギリスの社会構造 言語コミュニケーション 組織の連携 チャリティーグループ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1)日本人が英語をコミュニケーションに使いこなせるようになるためには、2200 時間ほどの学習が必要だと言われており(鳥飼 2017)、日本人はゲルマン語系の言語をルーツに持つドイツや、オランダの人たちに比べ、英語の習得に多大な努力を要する。英語の知識、技能の習得だけが問題なのではなく、コミュニケーションの土台になる「伝えたいことを、上手に伝える力」「自分の声をあげるための自信」が必須であると考え。もとより、日本の子どもたちは、自尊心、自己肯定感が低い。高コンテクストの社会、察し合う文化の中で育つ日本の子どもたちは、まず、自分の考えを人に伝えることに自信を持つこと、母語で自分の意見を自信を持って話せることが重要なのではないか。(2)イギリスにおいて 1965 年、Andrew Wilkinson は Oracy「話すことを学ぶ」「話すことで学ぶ」という新しい概念を提案した(図1)。A. Wilkinson は、Oracy は教育において、Numeracy, Literacy と同等に重要であり、すべての教科を学ぶ際に必要不可欠なものであると主張した(Wilkinson 1999)。イギリス各地の教師たちが、発売され始めた録音機器テープレコーダーを駆使して、子どもたちが教室の内外で話す様子を録音して書き起こし、子どもたちが自分の考えを表現し、子どもたち同士や教師との間でやり取りをする中で学びを深めていく様子を読み取っていく。「話すことで学ぶ」授業研究が、教育現場で活発に行われていった。その動きは、国家プロジェクト National Oracy Project にまで発展する(Howes 1992)。しかし、80 年代、停滞する産業・社会を建て直すための識字教育、科学教育、算数力の必要性が問われ、サッチャー政権は教育改革を実施、識字能力を育てるための Literacy に重点が置かれた。政権が労働党、ブレア政権になっても、教育の方針には変わりがなく、“Oracy”という用語は教育界から消えた。(3)2012 年、30 年を経て再び Oracy という概念が教育の表舞台に戻ってきた。ロンドンの中心部、多様な民族的背景を持つ人々が住む地区に Oracy を学校全体の基盤に置く教育を進める School 21 が設立され 2015 年より、教育チャリティ団体 Voice21 が教育の基盤を担っている。

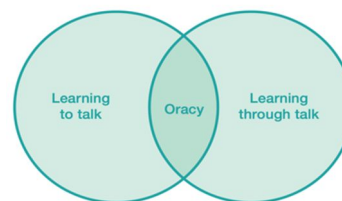


図1 .Millard, W. and Menzies, L. (2016) *The State of Speaking in Our Schools* より

2. 研究の目的

本研究の目的は、イギリスでの Oracy 教育の歩みとその背景を明らかにし、これからの教育実践の広がりを検証することとした。A. Wilkinson によって 1960 年代に Oracy の概念が発表された時代、そして 1990 年代に Oracy という語が姿を消した時代、また、その後 2012 年に Oracy が再生した時代、それぞれの動きの背景には何があったのか、要因は何かを明らかにする。また、復活した Oracy は、School21 と Oracy 教育を進める Oracy School においてその教育実践が体现されており、その教育はさらに広がっていくと考えられる。いかなる成果がどのような戦略でどのように実現されているのか。Oracy の再生を支えているものは何か。Oracy がたどった道と現在の姿、展望は、日本の子どもたちの言語教育の基盤となることのできる「話すこと」の教育に、多くの示唆を得られることが期待される。

3. 研究の方法

イギリスでの Oracy の歴史を、期(1965–1992)、期(1993–2011)、期(2012–)。それぞれの時期に分けて、Oracy 教育の背景と現状を明らかにする。イギリス現地での調査を基軸に、以下の研究方法を採った。(1)Oracy 関係者とのネットワークを構築する。(2)Oracy 関係者にそれぞれの背景や Oracy に関する役割、意識、展望などを聞き取る。(3)Oracy 教育に関する発行物から情報を収集す

る。(4)Oracy 教育の参考文献から検証する。(5)Oracy 教育の実践校を訪問し、生徒たちの話す様子、話すことを学ぶ様子を観察、また教員や学校運営者達から学校の教育方針や運営について聞き取る。

以上を踏まえて、2012 年以降、Oracy 教育の復興を支えている要因は何か。どのような構成員がどのような戦略で進めているのか、どういう教育を行い、いかなる成果を上げているのかを検証した。コロナ禍のため、最終年度を除き、教育現場の訪問見学が大変難しかったため、教育実践、教育効果の検証から、Oracy の歴史と組織の働きに研究の主軸を移した。

4. 研究成果

ネットワークの構築:Oracy Cambridge 代表の Neil Mercer 氏には何度も聞き取りができ、研究の進め方にも助言を得て、2023 年、Oracy Cambridge Conference (2019)で同席した近接の研究分野を持つ川地亜弥子氏(神戸大学)と Oracy JAPAN(Oracy 研究会)を立ち上げ、研究会を開催した。

また、最終年度の昨年は、Wiltshire Oracy Project, National Oracy Project に深く関わっていた Alan Howe 氏からも直接話を聞くことができた。また、Voice21 の中心人物 A. Gaunt 氏にも継続的に聞き取りができています。

第一期(1965 年–1992 年:A. Wilkinson が Oracy を提唱してから、National Oracy Project が終わるまで)1965 年に A. Wilkinson によって Oracy という概念「話すことを学ぶ」「話すことによって学ぶ」が提唱された。それは、Vygotsky, Piaget の流れを汲む、James Britton(1970), Douglas Barns(1976)ら研究者達の「話すこと」と「学ぶこと」の関係についての研究の高まりから生まれたことが明らかになった。D. Barns が提唱した Exploratory talk(探究的会話)は Oracy の中心概念として、研究の核となっている。1980 年代前半、教師達は、教室で起こっている子ども達の口頭でのやりとりを促し、録音、書き起こし、その中で起こっている生徒達の学びを次々と可視化し、教育のあり方を探った。1983 年地方公共団体のチーフアドバイザーであった Mike Binks が中央政府から資金を確保し Wiltshire Oracy Project(1983-1986)が実現した。A. Howe は、Wiltshire Oracy Project のディレクターとなり、6 つの中等学校を組織してプロジェクトに参加させ、各学校の教師たちに、Oracy の 2 つの側面、「話すことを学ぶことと、話すことで学ぶこと」に目を向けること、学びの中の「話すこと」の役割を探求することを方向づけた。そして、生徒たちが学校を卒業し、どんな進路を取ろうとも携えていける Oracy の力と自信を身につけることを目標としていたことにも言及している。この他、同様の小さなプロジェクトが地方に広がって行った。また、多くの大学の研究活動がそれらの研究を支援していた。A. Wilkinson, Terry Philips(East Anglia University), N. Mercer(Open University), D. Barns(Leeds University)ら研究者の名前が上がっている。やがて、そのうねりが国家プロジェクト National Oracy Project(1987-1992)につながる。

第二期(1993–2011)「Oracy はどういう背景、経緯で姿を消したのか」(1)社会的背景政治的な意図:この頃イギリスは産業、経済の停滞からの脱却を切望していた。保守党政権を率いるサッチャー首相は、教育改革を断行。全国共通カリキュラム、全国学力テストが始まり、その結果がリーグテーブルとなって公表され、学校選択が自由化された。(2)キーパーソンの意図:National Oracy Project は最高責任者の「教室内で生徒たちが話すことは教育と相反する」と考える保守的な教育観によって停止され、代わって National Literacy Strategy が立ち上がる。話すことの教育は、渦中にいた A. Howe をはじめとするそれまで Oracy に関わってきた人々の再三の努力にもかかわらず、National Curriculum(1989)の中では Speaking and Listening という表現に取って代われ、この後 Oracy という用語、概念自体が使われることは無くなる。

第三期(2012 年以降)「Oracy の再生の要因は何か」(1)キーパーソン達のリーダーシップ:

School21 創立者の一人, Peter Hyman は, 自身のバックグラウンドと経験から「ことば」と「教育」の大切さを体感しており, 内ロンドン, 移民としてのバックグラウンドを持つ人たちが多く住む地域に 4 歳から 16 歳まで(現在 18 歳まで)の教育を独自のカリキュラムで運営できる School 21 を開く。P. Hyman は, 開校に先立ち, ケンブリッジ大学教育学部の心理学者 N. Mercer と, 教職教育経験が長く, 「話すこと」を促す教材を数多く製作している Lyn Dawes(2008)の協力参加を求め, “Oracy”を復活させ, School21 の教育の中心に置くことを確認する。N. Mercer は, ケンブリッジ大学内にプロジェクト Oracy Cambridge を創設し, 関係する研究者を呼び集めている(Peter Dudley, Alan Howe, Ayesha Ahmed ら)。「話すこと」の教育に対し, まず指摘される「評価基準」を明らかにする教材 Oracy Assessment Tool Kit, 教育指針となる Oracy Framework などを作成し, Oracy 教育の再開を理論面で支えた。

School21 の教員と協働し, カリキュラムの立案・計画や教材の開発, 指導者の養成, 連携校の拡大, 広く国内外に向けた講習・研究会の実施など教育の開発, 普及, 振興に総括的に携わっているのが教育チャリティ団体の Voice21 である。これを 2023 年度まで 8 年間に渡り, 強いリーダーシップを発揮して牽引してきたのが Beccy Earnshaw(CEO), 若手メンバーの中心となり Oracy 教育の理論と実践を牽引しているのが, Amy Gaunt(Senior Leader)である。(2)リサーチエビデンスの公開: Voice21 は一貫して教育理論を裏付けるエビデンス, データを出版し続けており, 上記(1)(2)のマンパワーと分業がそれを可能にしている。最初に Voice21 の教育の根拠・理論を明示した *Oracy The State of Speaking in Our School* (LKMco, BIG CHANGE), *Transfer Teaching and Learning through Talk* (Gaunt A. and Stott A.), 教師の Oracy 教育を支援する指針 *The Oracy Benchmarks*, Oracy 教育を実践する学校での教育成果 Voice21 Oracy Schools Impact 2021, コロナ禍の中, 教育計画を建て直した Voice21 Insights and IMPACT REPORT など公開している。(3)Oracy 教育活動の分業-教育チャリティー団体, 大学との協働: Oracy 教育実践モデル校である School21, 教育計画の母体である Voice21 を核に, (2)で述べたエビデンスの検証, 公開においては様々な教育支援団体, チャリティ団体, 大学が調査, 研究を分担している。LKMco, BIG CHANGE などをはじめとする協力団体では, 若い構成メンバーが秀逸な企画力, 行動力, コミュニケーション力を発揮しネットワークを自在に形成し, 分業しながら協働している点が顕著である。(4)Oracy 教育の拡散: 教師の育成, 教育支援と: 以上の教育を実践する学校 Oracy School(メンバーシップ制。Voice21 のチームから教育のサポートを受ける。), 海外の学校を対象にした Oracy International Leaders (オンライン, メンバーシップ制の講座)などを展開している。(5)Oracy 教育の展望: Oracy All-Party Parliamentary Group(Oracy 議員連盟)を束ねる Emma Hardy MP は教師経験を持つ労働党議員である。Oracy 教育を支援しており, Oracy に関する詳細な Report の作成を要請した(*Speak for Change*; 2021)。2024 年現在, 総選挙を目前にしている労働党党首 Keir Starmer は, Oracy 教育実践の草分けであるロンドン・カムデン地域にある Trriano 小学校卒業生で, Oracy 教育を支持する方針を述べている(“Speaking skills key to break class barriers, says Keir Starmer”, 6 July 2023, BBC)。労働党が政権を握り, K. Starmer が首相となった際は, Oracy 教育にとって新たな局面となるだろう。

(6)2023 年 12 月には, 神戸大研究者川地亜弥子氏らと共に調査研修を合同で実施, 上記, ロンドン・カムデン地域の Trriano 小学校, Christopher Hatton 小学校を訪問見学することができた。学校の運営を行う Head Teacher, 広報担当の教員から, 校内の案内, 学校の沿革・教育方針説明を受けた。

以上パンデミックの時期を含めて, 可能な情報を収集し, 研究を進めた。今後, 日本ではあまり知られていない Oracy 教育を Oracy JAPAN(Oracy 研究会)の活動と出版という形で研究を続け, 公開していく予定である。(*注 人物名は基本的に敬称略, 所属名は当時のものとする。)

【参考文献】

- Barnes, D (1976) *From Communication to Curriculum*, Harmondsworth, Penguin
- Barnes, D., Britton, J., Rosen, H. & the L.A.T.E (1969) *Language, the Learner and the School*, Boynton/Cook
- Barnes D. (1992) The Role of Talk in Learning in *Thinking Voices*
- Britton, J. (1970) *Language and Learning* (Pelican), Penguin Books
- Dawes, L. (2008) *The Essential Speaking and Listening: Talk for learning at KS2*. London: Routledge.
- Gaunt A. and Stott A. (2018) *Transfer Teaching and Learning through Talk* Harmondsworth : Penguin.
- Howe A. & J. Johnson (1992) *Common Bonds*, Hodder & Stoughton
- Littleton, K. and Mercer, N. (2013) *Interthinking: Putting Talk to Work*, Abingdon: Routledge
- MacLure, M., Phillips, T., and Wilkinson, A., (1988) *Oracy Matters*, Open University Press
- Mercer N. (2019) *Language and the Joint Creation of Knowledge*, Routledge
- Millard, W. and Menzies, L. (2016) *The State of Speaking in Our Schools*, CfEY and Voice 21
- Norman K. (1992) *Thinking Voices –The work of the National Oracy Project –* , Hodder & Stoughton
- Phillips, T.,(1992) Why? The Neglected Question on Planning for Small Group Discussion in *Thinking Voices*
- Wilkinson, A., (1988) *Oracy Matters*, Milton Keynes: Open University Press
- 鳥飼玖美子 (2017) 『話すための英語力』, 講談社現代新書

[Voice 21 関連出版物]

Voice21 Oracy Schools Impact 2021

Voice21 Insights and IMPACT REPORT

[Web page]

“Speaking skills key to break class barriers, says Keir Starmer”, 6 July 2023, BBC

<https://www.bbc.com/news/uk-politics-66113585>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 矢野英子
2. 発表標題 「イギリスにおけるOracy（オラシー）教育の現状（3） イギリスでの活動の広がりと日本での必要性」
3. 学会等名 日本教育方法学会第58回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢野英子
2. 発表標題 イギリスにおけるOracy(オラシー)教育の現状(2) 「話すことで学ぶ・話すことを学ぶ」理論と実践
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢野英子
2. 発表標題 「イギリスにおけるOracy（オラシー）教育の現状から」
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢野英子
2. 発表標題 Oracy教育に関する最新動向
3. 学会等名 第1回Oracy研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 矢野英子
2. 発表標題 Oracy教育の最前線
3. 学会等名 第2回Oracy研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------